企画・展示　山口大学図書館

http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp

時は幕末・・・

「ペリーの横浜上陸」(ハイネ原画によるブラウンの石版画　1855 年刊)
『ペリー来航と横浜』(2004 年　横浜開港資料館編・刊)より

動乱の時代へ

1853 年、浦賀に来航したアメリカの提督ペリーは、日本に開国を迫った。この黒船来航以来、日本は動乱の時代へと突入する。
翌年、幕府は日米和親条約を締結、1858 年には、大老、井伊直弼が勅許を得ないままに、日米修好通商条約を締結。同様の条約は、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも次々に結ばれ、波紋を呼んだ。幕府と朝廷の在り方、そして日本と列強の関係。国内では様々な主張が飛び交うようになる。

その時、庸三は・・・

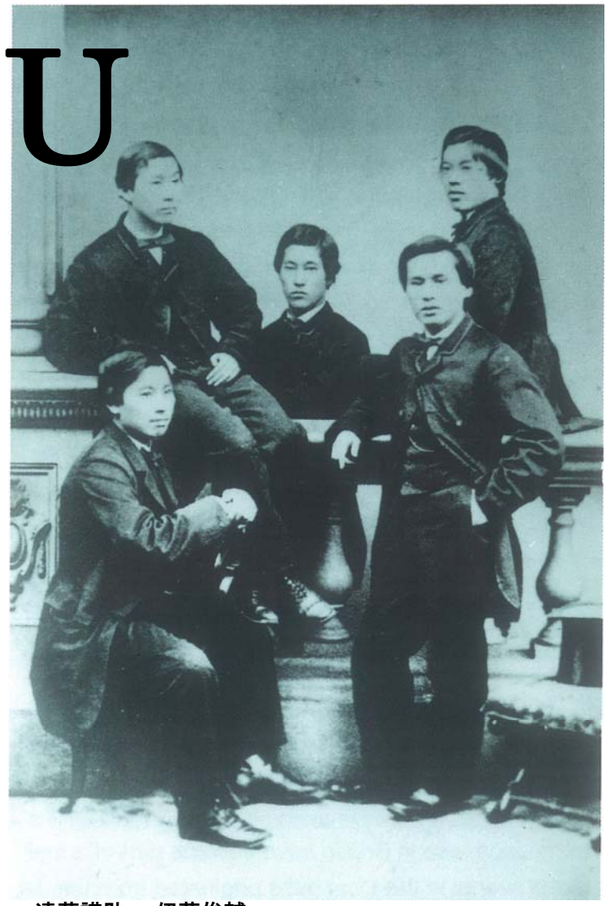
庸三は 1861 年、幕府貿易船亀田丸に乗り組み、ロシア領沿海州を見学。庸三にとって、初めて触れる外国であった。
その経験をかわれてか、翌年八月には、幕船壬戌丸に志道と乗り組む。しかし、江戸湾内をうろうろするだけで、とても操縦できたとは言えない状況であった。
黒船を率いて猛烈な勢いで押しかけてきた列強、そして、それに揺らぐ日本。その中にあって、庸三が見出したのは、未だ船も満足に操れない小さな自分であった。
そして、庸三の中に、外国への留学の必要性が強く意識されるようになったのである。

長州と薩摩、そして英国

衰退する幕府を倒し、朝廷に権力を持たせようとする長州藩と、朝廷と幕府を結びつけることによって、幕府を存続させようとする薩摩藩は、幕末の動乱期において、互いに敵対しあう関係であった。

尊皇攘夷か開国

CHOSHU FIVE



遠藤謹助　伊藤俊輔（博文）
野村弥吉（井上勝）
志道聞多　山尾庸三（井上馨）
『Japanese in Britain 1863-2001 A Photographic Exhibition』より

長州ファイブの誕生

約 130 日の過酷な航海を経て、1863 年 9 月 23 日、庸三ら五人はロンドンに到着した。

ロンドン大学ユニバーシティカレッジ

ロンドン到着後、五人はロンドン大学ユニバーシティカレッジのアレキサンダー・W・ウィリアムソンを紹介される。
ウィリアムソンの知遇をうけ、彼らはロンドン大学で学ぶこととなる。伊藤、志道は軍事・政治・法律を、庸三は工学、野村は鉱業や鉄道、遠藤は経済・貿易をそれぞれ専攻したという。
ここでの経験が、帰国後の彼らの人生に、そして近代日本に大きな影響を与えたことは、明らかであろう。

先進技術との接触

学業の余暇には、彼らはイギリス各地の造船所や、海軍の施設、さまざまな工場など見学した。
目に映る先進技術の数々が、船も満足に操れない庸三らにとって、どれほど刺激的なものであったかは、想像に難くない。

薩摩藩士との交流

ロンドンに着いてから、一年半以上も経った頃、庸三らは同じロンドンに、薩摩藩士らが留学していることを知る。揺れ動く日本の将来を見据えて、海外の技術の必要性を痛感したものか、薩摩藩でも、グラバーの援助によって、やはり藩士ら十九名をロンドンに留学させていたのであった。
1865 年閏 5 月 10 日、庸三ら三人は、薩摩藩留学生宿舎を訪れ、日本の現状などについて、話したという。
薩長同盟が結ばれたのは、1866 年 1 月のこと。遠く離れたイギリスで、長州藩と薩摩藩、共に日本のこれからを切実に考える者らの交流は、すでに始まっていたのであった。